

The Picture of Dorian Gray における支配／被支配

北 田 沙 織

はじめに

Oscar Wilde (1854–1900) は、ゲーリック・リーグやアイルランド文芸復興に関わりを持たず、実際、オックスフォード大学卒業後もアイルランドにはほとんど帰郷していないことから、自身のアイルランド人としてのアイデンティティに特別な拘りを抱くことはなかったように思われている。しかし、あまりその内心を明かすことはなかったと言われており、その真意は定かではない。ただ、彼の作品、*The Picture of Dorian Gray* (1891) を見ると、「支配」や「奴隸」、「植民地」という言葉が多く見受けられ、祖国に影響を受けているものと考えざるを得ない。非常な愛国主義者であった William Wilde や、急進派の青年アイルランド党を支持し、国家独立を強く望む煽動的な詩を多数執筆した Jane Francesca Wilde という両親を持ったことも、彼に少なからぬ影響を与えていたのだろう。Julia M. Wright が *Ireland, India, and Nationalism in Nineteenth-Century Literature* (2007) の中で、ワイルドは一個人の不道徳性を大英帝国の略奪行為の物語へと転換させていると論じているように、悪事に手を染め、人々の人生を転落させていく支配者 Dorian Gray には、帝国主義的なイギリスの姿が投影されているのではないだろうか。しかし、その一方で彼は被支配者でもあり、ワイルドがアイルランド出身であることに着目してこの作品を見ると、そこには、支配と被支配のテーマが浮き彫りにされているように思われる。本稿では、ドリアンの中に、イギリスによる支配と植民地諸国の被支配という構図が見られることを検証したい。また、作品の中で、永遠の若さと美を手に入れながらも、年長の友人たちに影響されたドリアンは正常な心を失っていく。自身の美貌が保

たれる一方で、彼の犯す悪は肖像画に醜悪さを帯びさせていくこととなり、表面的な「美」と肖像画に反映される内面的な「醜」、すなわち表と裏の二つの顔を併せ持つことになるのだ。同様に、イギリスにも輝かしい繁栄の裏に、その経済力を影の如く支えた幾世紀にも亘る植民地支配があり、植民地や従属国の存在無くして世界最強国家、大英帝国の成立は困難を極めたことだろう。ドリアンの表と裏という二重性に大英帝国の二面性を重ね、両者の表と裏の境界線の不安定性についても考察する。

1. 支配するドリアン

「東洋」に魅了されているドリアンは、インドやトルコ、日本、アフリカなどの宝石や装飾品、芸術品、楽器を収集し、インド人をはじめ、チュニジア人などのアフリカ系民族、ジプシーとの音楽会の開催も行う。ここでいう東洋とは、Edward W. Said が *Orientalism* (1978) の中で指摘したように、西洋以外のほぼ全ての地域を指しており、東洋に陶醉していくドリアンを、イギリスの植民地獲得の狂奔と結び付けることが可能だろう。

John M. MacKenzie によれば、オリエンタリズムは、1870年代に入ると批判を受けるようになるが、1880年代から1890年代にかけて人気を再確立し、その勢いは第一次・二次世界大戦頃まで続いた。東洋的な絵画作品の中には重要なものが残されている一方で、時流の恩恵を受けただけの低俗な模倣作品も数多い。実際には東洋に一度も赴いたことのない者によって描かれたものもあるが、当時の西洋、とりわけフランスやイギリスにおいて、オリエンタリストと呼ばれた芸術家の数は非常に多く、東洋をモチーフとした絵画は好んで描かれたようである (MacKenzie 43-44)。オリエンタリズム絵画の中でも著名なのは、Jean-Auguste Dominique Ingres や Eugène Delacroix、James McNeill Whistler などが挙げられ、ドリアンが好んで読んだ Théophile Gautier も東洋に関する旅行記を著している。

このように時代に愛された「東洋」は、当時のイギリスにとって魅惑の対象であったと言え、それはジャポニズムの動きからも見受けられる。イギリ

スは世界に先駆けて産業革命に成功したものの、科学技術の進歩に傾注し過ぎた結果、工芸品の衰退を招くこととなり、これを憂慮したイギリス政府は国民全体のデザイン意識を高めようと努め、世界中から優れた工芸品の収集に励んだ。そして、日本の工芸品は高く評価され、1862年のロンドン万国博覧会以降、イギリスの国民に日本の工芸品が支持されるようになり、万博終了後にはロンドンで東洋の品物を扱う店が出現した（小野6）。しかし、当時の大英帝国は東方諸国を魅惑の対象として捉えていたと同時に、劣等且つ未開の地であるがゆえに指導下に置くべきだという思想の下、インドやアフリカなどの植民地化を押し進めていったのである。

これと同じく美に目覚めたドリアンは、次第に悪事に手を染めるようになり、多くの人を支配し破滅へと導いていく。彼の支配は、イギリスが東洋に行った搾取が政治的・経済的なものであったのに対し、人間に対する精神的な搾取だと言えるだろう。ここで注目したいのは、ドリアンが悪を行う場所である。彼はロンドンの東側を選択するが、ここは19世紀後半に、貧困に喘ぐ人々が移民として流入した地域であったのだ。Henry Mayhew によれば、イギリスの商人は移民を快く思っていなかったが、とりわけアイルランド人は、「侵入者」として「忌み嫌われた」ようだ（Mayhew 87）。そして、住人の多くが日雇い業を強いられるという過酷な状況下であって犯罪が横行し、生計を立てるために娼婦となることを選んだ女性も多数存在した。更にはコレラやペスト、インフルエンザなどの感染症が流行し、衛生環境は劣悪なものであった。実際にドリアンがイースト・エンドに関して語る場面がある。

“Well, one evening about seven o'clock, I determined to go out in search of some adventure. I felt that this grey, monstrous London of ours, with its myriads of people, its sordid sinners, and its splendid sins. . . . The mere danger gave me a sense of delight. I remember what you had said to me on that wonderful evening when we first dined together, about the search for beauty being the real secret of life. I don't know what I expected, but I went out and wandered eastward, soon losing my way in a labyrinth of grimy

streets and black, grassless squares”. (44)

このようなドリアンのセリフから、彼は冒険あるいは危険を求めて外出し、気付くと東方を彷徨い、半ば無意識的にイースト・エンドに引き寄せられたと推察でき、このような背景や土地柄も相俟って、彼はこの地域に誘われたと言える。また、ドリアンがロンドンを「灰色の怪物のようなロンドン (grey, monstrous London)」(44) と表現していることも興味深い。grey は、灰色の空、すなわち産業革命によってもたらされたスモッグのことを指していると考えられるが、白と黒が混在した灰色は、イギリスの表と裏の混在を含意しているのかもしれない。大英帝国の繁栄の裏に植民地化があることを示唆しており、そのような国家の在り方を怪物のように恐ろしいと呼んだのではないだろうか。そして、その大英帝国の姿を表すドリアンが、Gray という姓であることを考えると、我々は初めから、彼の内に潜む二重性に気付く手掛かりを与えられていたことになる。

支配者となった彼の最初の被害者は、彼の婚約者 Sybil Vane である。イースト・エンドにある小さな劇場で彼女に出会い恋に落ちたドリアンは、彼女の美しさを次のように表現する。

“[A] girl, hardly seventeen years of age, with a little flower-like face, a small Greek head with plaited coils of dark-brown hair, eyes that were violet wells of passion, lips that were like the petals of a rose. She was the loveliest thing I had ever seen in my life. . . . And her voice—I never heard such a voice. . . . sounded like a flute or a distant hautbois. . . . the wild passion of violin. . . . I do love her. She is everything to me in life”. (45–46)

このようにシビルの美しさを絶賛する彼だが、彼の愛情の対象は彼女自身ではなく、何より彼女が演じる Ophelia、Juliet、Rosalind、Imogen としての彼女なのである。彼女がシビル・ヴェインとして存在することは決してないと断言するドリアンは “She is all the great heroines of the world in one” (49)

という語りからもわかるように、彼が愛しているのはシビルの才能であり、彼女という人間に対する評価は全く見受けられない。しかし、ドリアンを“Prince Charming” (53) と呼び、“Prince Charming rules life for us now” (53)、“I shudder at the thought of being free” (59) と彼の支配を肯定する発言をするシビルの目には、ドリアンは王子の如く映っており、彼が自身の支配者となることを認めているのだ。我を忘れたように高揚するその姿は、まるで歓喜する「籠の中に閉じ込められた鳥 ([t]he joy of a caged bird)」(54) のようであり、「情熱という牢獄 (her prison of passion)」(54) に囚われているかのように描写されている。

一方、ドリアンを純粋に信用しているシビルとは対照的に、弟 James Vane は、身元を一切明かさぬ彼に警戒心を抱き、“He wants to enslave you” (59) と警告を促す。このような二人の描写や発言は植民地化や奴隷制を強く思わせ、ジェームズの発言は、母親が裕福で地位のある紳士だった父親と結婚していない事実を確認した彼が、姉が母親の経験した失敗の二の舞を演じることになりはしないかと懸念していたことによるものであると推察できる。この時点においてヴェイン家に悲劇の連鎖が起こり得ることはある程度の想像がつく。彼は、ドリアンが彼女を精神的な奴隷にしようと企んでいると考えたのだと思われ、更に、ジェームズが船乗りとして出稼ぎに向かう予定のオーストラリアについての母親の言及や、彼は船乗りや金鉱夫に取まることなく、羊飼いになるべきだというシビルの助言は、当時の実際の植民地化を思わせる。オーストラリアでのジェームズの生活の描写は全くないものの、まさにこれから実際の植民地に向かおうという状況から、ドリアンによって浸食されていくヴェイン一家の様相が読者に印象付けられるのだ。

悲劇が起きるという予想は後に現実のものとなり、それまで愛を演じてきたシビルであったが、ドリアンと出会い真の愛を知ったことにより、演技力を失ってしまう。もはや才能を持たないという理由で残酷にも見捨てられたシビルは絶望感に襲われ自殺するが、彼女の訃報を耳にした彼の反応は次のようである。

“I must admit that this thing that has happened does not affect me as it should. It seems to me to be simply like a wonderful ending to a wonderful play. It has all the terrible beauty of a Greek tragedy, a tragedy in which I took a great part, but by which I have not been wounded”. (84)

この語りは、彼にとってシビルという女性がどのような存在であったのかを証明している。屍となった少女の死に様に美を見出すということ、それはもはや彼女に対して人間的な感情を抱くことはなく、彼女を芸術作品であるかのように捉えていることの表れだと言え、「個人以上の存在 (more than an individual)」(49)であった彼女が才能、芸術性を失うことで、彼女は彼にとって無価値なもの同然となってしまうのだ。彼の彼女に対する扱いは奴隷を扱うようであり、ドリアンはその美貌という武器で彼女の最大の魅力を奪い取るのである。

そして更に、彼が犯罪者と関係を持ち、偽名を名乗り変装してホワイトチャペルにある怪しげな場所へと通い詰めていると囁かれ、彼に纏わる様々な黒い噂が立ち始める。その真偽を確かめようと彼の許を訪れた画家 Basil Hallward は、次のように詰問する。

“Why is your friendship so fatal to young men? There was that wretched boy in the Guards who committed suicide. You were his great friend. There was Sir Henry Ashton, who had to leave England, with a tarnished name. You and he were inseparable. What about Adrian Singleton, and his dreadful end? What about Lord Kent’s only son, and his career? He [His father] seemed broken with shame and sorrow. What about the young Duke of Perth? What sort of life he got now? What gentleman would associate with him?” (126 – 127)

これまでドリアンの悪事に関して直接的な言及がなされていなかったが、バジルのこの発言によって我々読者は初めてこのような事実を知らされるのである。全く反省の色が見られないドリアンだが、“I want you to lead such a

life as will make the world respect you. . . . You have a wonderful influence. Let it be for good, not for evil” (128) と訴えかけるバジルの様子から、彼の更生を一心に願う心情が窺える。それでも、醜悪さを帯びたドリアンの肖像を目の当たりにした彼は、恐怖と驚愕のあまり、“It has the eyes of a devil” (131) と言葉を荒げるが、かつては純真無垢であったドリアンを変貌させてしまった一因が自身にもあると考えその責任を強く感じる。このように誰よりもドリアンのことを案じていたバジルに対し、ドリアンは自身の悪行を省みることなく、自らの破滅を招いたのは、バジルが肖像を描いたことに起因するという考えに捉われ、バジルを惨殺するのである。そしてこの時点で、殺人という最悪の支配行為に走ったドリアンはおぞましい殺人鬼へと成り下がってしまったと言え、Richard Ellmann が “Dorian not only espouses decadence: he decays in every way except physically” (17) と指摘するように、彼は外的な美しさこそ変わらないものの、内的な美しさを失い墮落者となってしまうのである。

更に、ここで注目すべき点は、彼が悪を行う活動範囲が移行しているということである。初めはイースト・エンドという裏の世界で悪事を働いていたドリアンだが、その活動範囲はいつの間にか拡大し、富裕層が多く住んでおり自らも住む表世界をも侵しているのだ。先に引用したジュリア・M・ライトは Lord Henry Wotton やバジルなどのウェスト・エンドの住人の肌が東洋人のような「オリーブ色 (olive-coloured)」(21)、「しわが寄りやつれた黄色い色 (wrinkled, and worn, and yellow)」(178)、「きらりと光る黄色い顔 (glistening yellow face)」(145) をしていると表現されているのに対し、イースト・エンドの住人の肌色は概して白色に統一されている (“those in the East End, and the working classes in general, are aligned with whiteness”) (Wright 190) と論じているように、このような西と東のイメージの逆転により、ウェスト・エンドとイースト・エンドの優劣関係は不明瞭なものとなる。更に、肌の色から連想される人種的なステレオタイプを崩すことで、ウェスト・エンドとイースト・エンドの階層的な関係をも反転させているよ

うである。ロンドンにおけるウェスト・エンドとイースト・エンドが、当初は西と東という支配と被支配の関係を表す縮図となっていたのが、このように自己制御能力を失ったドリアンが、イースト・エンドに止まることなくウェスト・エンドを浸食し、双方への往來を繰り返すことによって、西と東の境界線が揺らいでいると言えるのではないだろうか。

2. 支配されるドリアン

ドリアンは人々を破滅へと導く支配者だが、同時に多くのものに支配される被支配者でもある。まず、彼の生い立ちについて把握する必要があるだろう。ここで重要となるのは、ドリアンが孤児であるということだ。彼は上流階級の生まれであったものの、両親を幼少期に亡くしており、残酷なことに祖父 Lord Kelso が彼の両親を死へ追い込んだという事実があるのだ。保護者となった祖父からは好ましく思われず、誰からの愛情も受けることなく孤独な子ども時代を過ごしたことから、精神的に不安定であり心の拠り所となる存在を切望していたのではないだろうか。それこそが年は10歳しか離れていないものの、邪な考えを抱き彼に近付くが、常に行動を共にするほどの仲になるヘンリーがドリアンにとって親代わりとなり得た所以だろう。そして、このような不幸な境遇が彼の歪んだ精神、性格を形成した可能性があり、彼を支配されながら支配するという負のスパイラルに陥らせる要因となったのだろう。ドリアンが東方諸国に魅了されたのも、祖父がヨーロッパの美術品を収集していたことに対する反動だったのではないかと推察できる。また、平凡且つ変化のない日々を送っていた彼にとって、ヘンリーの世界観は未知との遭遇であり、刺激的で心惹かれるものであったのだろうが、それ故に、彼はヘンリーに依存し過ぎる結果となってしまったと言える。

加えて、ドリアン之美しさと純粋さに魅了されているバジルとヘンリーは、彼を美の象徴、体現物と見なしており、バジルは“*When I like people immensely, I never tell their names to any one. It is like surrendering a part of them*” (8) と述べ、ヘンリーが初めてドリアンに直面した際の印象が“All

the candour of youth was there, as well as all youth's passionate purity. One felt that he had kept himself unspotted from the world. No wonder Basil Hallward worshipped him” (17) と語られている。以上のような発言から、彼らはドリアンに強い独占欲を抱き、彼という美しいものに対して所有権を掌握しようとしているように思われ、このような二人の姿は、「誰にも発見されていない (unspotted) (17) 汚れない」未開の地に対して植民地支配を行った帝国主義的なイギリスの姿と重なる。

このような支配行為を受けた反動から、ドリアンは自身が支配者となりシビルを支配するに至ったのだ。しかし、シビルは彼の被害者である一方で、彼の支配者でもあると言えるだろう。一時的であったとはいえ、彼がシビルの美しさに魅了されていたことは事実であり、彼は彼女の死後もその影響を受け続けることになる。ドリアンは、彼女の検死結果を使用人の Victor に見られはしなかったか、彼女との関係に疑念を抱かれていないかと激しく懸念し、ヴィクトールを解雇することから彼の焦燥感が窺える。そして、彼女の死から18年が過ぎた頃、ドリアンは姉シビルの復讐に余念がないジェームズに命を狙われることとなり、このように、ドリアンは彼女の生前も死後においても彼女の影に追われ、死の直前に Hetty Merton という女性を愛した理由を “She was quite beautiful, and wonderfully like Sybil Vane” (173) と説明するように、生涯を通じて彼女の存在に囚われ続けるのである。

あらゆるものに支配されるドリアンだが、最もドリアンを支配しているのは彼自身の肖像画である。初めは、変化を遂げていく様子を観察することに快感を覚えていた彼だが、次第にその醜悪さを増す肖像に絶えることのない恐怖を感じ始め、それが他人の目に晒されることを酷く恐れるようになる。そして、肖像を見せることに強い拒否反応を示していたにもかかわらず、ある日突然バジルに肖像を公開し自らの「魂の顔 (the face of my soul)」(131) だと告白する。この時点において彼の感情に大きな変化が見られるが、彼は自らの精神的苦痛を他人に共有させることによって、その緩和を図ろうとしたのだろう。しかし、バジルを殺害後肖像は一層醜悪さを帯び、彼はより激

しい苦痛を体験することとなり、そのようなドリアンにとって、いつしか麻薬が恐怖から逃れる唯一の手段となっているのである。“The hideous hunger for opium began to gnaw at him. His throat burned, and his delicate hands twitched nervously together” (154) という描写から、完全に中毒症状に陥っていることが明らかであり、彼の苦悩は絶頂に達していると言えるだろう。

このような恐怖の中、更にドリアンを苦しめているのは、前述した復讐に燃えるジェイムズの存在である。彼が事故死したことによりドリアン自身の安全は確保されるが、一方で彼の死がドリアンにとって人生の転換期になったことは確かだろう。精神的限界を迎えた彼は、放蕩の限りを尽くしてきた自身の過去を悔やみ、更生の道を歩みたいと願う。しかし、如何様にしても肖像から醜悪さが薄れることはなく、殺人を犯したことに対する重い十字架を一生背負い続けなければならないという現実に、罪の意識から逃れることができないと悟るのである。そして、このような激しい苦悶はドリアンを肖像の抹殺へと駆り立てるが、ナイフを身に受け死を遂げていたのは彼自身であり、美しさを誇っていたはずのその顔は「老け衰えたしわだらけの忌まわしい容貌 (withered, wrinkled, and loathsome of visage)」(184) へと変わり果ててしまうのだ。“[S]mite us for our iniquities should be the prayer of man to a most just God” (181) と自らに罰する言葉をかけていたドリアン的心情を察するに、これは人生を悲観した彼の自殺だと考えられ、肖像に固執し影響され続けた彼は、精神的にも肉体的にも完全に破滅してしまったと言えるだろう。

また、彼の死は支配された結果の末期だと言える一方で、支配者としての彼に注目すると違う解釈を行うことも可能だろう。“[D]on't deceive yourself” (178) とヘンリーが言うように、ドリアンが善人として生まれ変わろうと行動に移していることは、単なる偽善であるように思われる。長年に亘り悪事を働いてきた彼が、それまでの生き方を省み、ヘッティの誘惑を断念するわけだが、ただそれだけのことを善行と呼べるはずはなく、これはある意味で年を重ねてきた彼の衰退と見なすことができる。このような偽善

的行為は、ヴィクトリア朝時代の大英帝国が幾世紀にも亘り、いわゆる「文明を持たない国々」の発展貢献という名目の下に植民地化を図ったことに重ねることができ、ドリアンはそのようなイギリスの姿を体現していると言えるだろう。また、ドリアンに出会う以前に、彼のことを“young Adonis”（7）、“Narcissus”（7）だと呼んでいたヘンリーは、彼の死を予見していたかのようであり、その死は偽善的な国家、大英帝国の衰退を表していると捉えることが可能ではないだろうか。

3. ワイルドの植民地支配批判

前の二章では、ドリアンが支配者であると同時に被支配者でもあることについて分析し、彼の描写の中にイギリスの支配と植民地の被支配が投影されていることを論じてきたが、本章では、ドリアンが自身の醜悪さ、裏の面を隠し切れなかったことに注目したい。完璧だったはずの彼の美貌は醜い老人のような容貌へと変わり、その醜悪さが公に露呈したことで、彼の二重性は読者に混乱を招く。そのことにより、彼の美と醜のどちらが表で裏なのかという判断を付け難くするが、当時のイギリスも同様の二重性を孕んでいたことを示唆していると思われる。イギリスの国家繁栄の裏には植民地支配があり、イギリスは多くの植民地や従属国によって支えられていたものであり、その関係は表裏一体と言えるだろう。

国内問題においても、上流階級は貧困層の労働生産力によって多大な恩恵を被っており、その存在無くして上流階級の成立は困難であったが、ワイルドは、富裕層は貧困層を「労働力の微小の原子（the infinitesimal atom of a force）」（Wilde 259）に過ぎないものと捉えていると『ドリアン・グレイの肖像』と同年に出版された批評、*The Soul of Man under Socialism*（1891）の中で指摘している。更に、Josephine M. Guy はこの小説を次のように評価している。

It is possible to read *The Picture of Dorian Gray* as an indictment of the

conspicuous consumption that underwrote the development of advanced capitalism, and which Wilde identified in “The Soul of Man” as producing a ‘false’ individualism that ‘made gain not growth its aim. (Guy 242)

ガイはこの小説に、高度に進んだ資本主義の発展を支えるイギリスの過剰な消費に対する非難を読み取ることが可能だと述べており、この一節で重要なのは、ガイの解釈からも明らかなように、ワイルドがその加熱した資本主義によって、「誤った個人主義」が生み出されたと認識していたことである。また、ガイが指摘するような大英帝国の当時の現状に関して、ライトも同様の見解を示している。“The London elite participate in a kind of “false consciousness” for the rich, “an Individualism that is false”, which seeks to find itself in property but only reveals itself in violence” (Wright 194) という彼女の指摘は、富裕層の資産の獲得及び蓄積が、誤った個人主義、言い換えれば弱者に対する暴力で成り立っていることを表しているのだ。ゆえに富裕層は貧困層の存在に支えられており、決してその財産が貧困層の関わりのない所で成された、全て個人に依る (self-supporting) ものであるとは言えない。彼らは深く関係し合う表裏一体の関係で結ばれており、両者を引き離して考えることはできないのだ。

『ドリアン・グレイの肖像』においても、イースト・エンドの問題が取り上げられる場面がある。ヘンリー卿がドリアンにイースト・エンドでの慈善活動を止めるよう説得し、その理由を “I cannot sympathize with that [suffering]. It is too ugly, too horrible, too distressing” (37) と説明する。「美しいもの (beautiful things)」(67) は「富裕層の特権 (the privilege of the rich)」(67) なのだと主張する彼は、まさにガイやライトが指摘する「誤った意識」を持つ代表格だと言えるだろう。

ワイルドのルーツがアイルランドにあり、その母国が12世紀頃からイギリスにより政治的、経済的、そして宗教的搾取を受け続けていたという史実を考慮すると、彼のイギリス批判を国内問題のみに止まらず国外問題、すなわ

ちイギリスの植民地化問題にまで広げて解釈することが可能だろう。

更に、ワイルドは“The true perfection of man lies, not in what man has, but in what man is” (Wilde, *The Soul of Man*, 262) と述べ、“Human slavery is wrong, insecure, and demoralizing” (Wilde, *The Soul of Man*, 270) という言葉を遺していることから、彼は奴隷制に関しても強い批判の意を示していたことがわかる。ここで明確に言えるのは、イギリスにとって植民地は必要不可欠な存在であり、植民地無くして大きく発展することは不可能な体制にあり、ワイルドの言う、所有することに異常な執着を見せていた大英帝国 (Wilde, *The Soul of Man*, 262) が不確かで不安定な要素によって構成されていたということである。ワイルドが、『ドリアン・グレイの肖像』の中で、主人公に恐ろしい死を与え、その醜悪さを公に露呈させたことから、彼の表と裏という二重性はもはや区別不能となるのだ。そして、ワイルドの生きた19世紀後半における植民地諸国の独立運動の加速に伴い、経済力の低下が進み、国家として不安定な状態にあったイギリスにとっても、その表と裏の関係は大きく揺らいでいると言えるのではないだろうか。

おわりに

『ドリアン・グレイの肖像』は世に出た当初、道徳的墮落を描いただけの不道徳な作品であるという批判を受けたが、本作品における主題は、道徳心を失い墮落の道を突き進んだ結果、心身の美しさを失い醜悪さを身に纏って凄惨な最期を遂げる主人公を描くことで、むしろ不道徳なものに対する警戒感を露わにした点にあるのではないだろうか。ワイルドは、アイルランド人であることに特別な意識は持っていないと思われる側面も見受けられたが、本作品『ドリアン・グレイの肖像』に描かれているメッセージからは、彼が心の奥底では、支配国イギリスと植民地との主従関係を覆そうとしていたように思われる。彼は、イギリスの二面性をロンドンにおける表世界であるウェスト・エンドと裏世界イースト・エンドに例え、西と東という支配・被支配の関係を表す縮図を我々に見せている。また、ドリアンの悪の手がイー

スト・エンドに止まらずウェスト・エンドにも及ぶことで、西と東の境界線は安定性を失うのである。以上のようなことから、ワイルドは、栄華を極めながらも植民地の存在に依存していた大英帝国がいかに不安定でガラスのような、強固に見えて実は脆い体制であるかを指摘しようとしたのではないだろうか。本小説において、頹廢の末には破滅が待ち受けているという寓話的要素を読み取ることも可能だが、それ以上に、栄華と繁栄を植民地によって支えたイギリスの光と影という二つの側面を読み込むことができるように思われる。

注

本稿は日本英文学会関西支部第10回大会（2015年12月20日）において、口頭発表した原稿を加筆・修正したものである。

参考文献

- Ellmann, Richard. "The Uses of Decadence: Wilde, Yeats and Joyce." *Bloom's Modern Critical Views: Oscar Wilde*. Ed. Harold Bloom. New York: Infobase Publishing, 2011. 11–26.
- Guy, Josephine M. "Oscar Wilde and Socialism." *Oscar Wilde in Context*. Ed. Kerry Powell and Peter Raby. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 242–252.
- MacKenzie, John M. *Orientalism: History, Theory, and the Arts*. Manchester: Manchester UP, 1995.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. Ed. Tom Griffith. Hertfordshire: Wordsworth Classics, 2008.
- McCormack, Jerusha. "The Wilde Irishman: Oscar as Aesthete and Anarchist." *Wilde the Irishman*. Ed. Jerusha McCormack. New Haven: Yale UP, 1998. 82–94.
- Melville, Joy. *Mother of Oscar—The Life of Jane Francesca Wilde*. London: John Murray, 1994.
- Ryder, Sean. "Son and Parents: Speranza and Sir William Wilde." *Oscar Wilde in Context*. Ed. Kerry Powell and Peter Raby. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 7–16.
- Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray, A Norton Critical Edition, Second Edition*. Ed. Michael Patrick Gillespie. New York: W. W. Norton & Company, 2007.
- . *The Soul of Man under Socialism, Oscar Wilde's Plays, Prose Writings and Poems*. Ed. Hesketh Pearson. London: J. M. Dent & Sons, 1955. 257–288.
- Wright, Julia M. "Bram Stoker and Oscar Wilde: All Points East." *Ireland, India, and Nationalism in Nineteenth Century Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 182–194.
- Victorian Women Writers Project, Indiana University, 2014.
 〈<http://webapp1.dlib.indiana.edu/vwwp/view?docId=VAB7166>〉

- 小野文子『美の交流—イギリスのジャポニスム—』技報堂出版株式会社、2008年。
- サイド、エドワード・W『オリエンタリズム』上・下巻。今沢紀子訳、株式会社平凡社、1996年。
- 山本正「世紀転換期のアイルランド問題」『イギリス帝国と20世紀 第2巻—世紀転換期のイギリス帝国—』木村和男編著、ミネルヴァ書房、2004年。83-97。